

第11回太平洋広域漁業調整委員会

平成20年10月9日
水産庁

1 開催日時

平成 20 年10月9日（木） 15:00～16:10

2 開催場所

三田共用会議所 大会議室

3 出席委員

【会長】

学識経験者 澁川 弘

【都道府県海区互選委員】

釧路十勝海区 川崎 一好

青森 海区 澤口 政仁

岩手 海区 大井 誠治

宮城 海区 阿部 力太郎

茨城 海区 渡辺 一夫

千葉 海区 小滝 季儀

東京 海区 竹内 正一

神奈川海区 宮川 満

静岡 海区 谷澤 輝雄

愛知 海区 吉戸 一紀

三重 海区 黒田 耕一郎

和歌山海区 海野 益生

徳島 海区 井元 健二

高知 海区 和田 義光

愛媛 海区 佐々木 護

大分 海区 佐野 八重

宮崎 海区 金丸 昌洋

【農林水産大臣選任委員】

漁業者代表 福島 哲男

漁業者代表	鈴木 徳穂
漁業者代表	山田 洋二
漁業者代表	山本 正喜
漁業者代表	金井 関一
漁業者代表	宮本 英之介
学識経験者	有元 貴文
学識経験者	山下 東子

4 付議事項

- (1) 水産資源の状況について
- (2) マサバ太平洋系群資源回復計画の取組状況について
- (3) その他

5 議事内容

開 会

○小林課長補佐 それでは、定刻となりましたので、ただいまから第11回太平洋広域漁業調整委員会を開催いたします。

本日は、海区互選委員のうち、福島県の佐藤委員、それから農林水産大臣選任委員のうち、伊妻委員が事情やむを得ず御欠席されておりますが、委員定数28名のうち定足数でございます過半数を超える26名の委員の御出席を賜っておりますので、漁業法第114条で準用いたします同法第101条の規定に基づき、本委員会は成立しておりますことを御報告いたします。

なお、今年は海区漁業調整委員会の委員の改選等がございましたことから、多くの委員が交代しております。新たに就任されました委員につきましては、既に本委員会の前の各部会におきまして御紹介いただきましたので、この場におきましてはお名前を報告させていただきますまして御紹介にかえさせていただきたいと思っております。新たに就任されました委員につきましては、岩手県の大井委員、それから本日欠席されておりますが福島県の佐藤委員、茨城県の渡辺委員、千葉県の小滝委員、神奈川県宮川の宮川委員、静岡県谷澤の谷澤委員、三重県黒田の黒田委員、和歌山県海野の海野委員、徳島県井元の井元委員、高知県和田の和田委員、愛媛県佐々木の佐々木委員、大分県佐野の佐野委員、大臣選任委員の宮本委員の計13名の委員でございます。

それでは、議事進行を澁川会長にお願いしたいと思います。

会長、よろしく申し上げます。

○澁川会長 太平洋広域漁業調整委員会の会長を仰せつかっております澁川でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、本日は、お忙しいところ御出席を賜りまして、また御来賓の方、多数御臨席を賜りまして心からお礼を申し上げます。

第11回太平洋広域漁業調整委員会でございます。

事務局からもございましたが、ことしは海区の漁業調整委員会の委員の改選ということございまして、海区互選委員の多くの委員の方々が交代されております。また、大臣選任委員の漁業者代表委員でございました宮本利之委員が御逝去されまして、後任の宮本英之介委員が御就任されております。宮本委員におかれては本委員会に置かれた太平洋北部

会と南部会の部会委員としても両部会に出席をいただくこととなっております。新たに御就任された委員の皆様方にはこれからもどうぞよろしくお願ひ申し上げたいと思ひます。

さて、本日の委員会でございます。初めに独立行政法人水産総合研究センターから資源回復計画の対象魚種でございます両部会にまたがるマサバ太平洋系群の資源状況について説明をいただくことになっております。続きまして、回復計画のマサバ太平洋系群資源回復計画の取組の状況についての説明がでございます。

委員の皆様方におかれましては、どうぞよろしくお願ひいたします。

挨拶

○澁川会長 さて、本日の委員会でございますが、水産庁から本村資源管理部長さん、木實谷管理課長さん、木島資源管理推進室長さん、また独立行政法人水産総合研究センターから中央水産研究所の堀川資源評価部長さんほか多数の方が御出席されております。

議事に入ります前に、代表して本村部長さんから御挨拶をちょうだいしたいと思います。

○本村資源管理部長 資源管理部長の本村でございます。

実は山田長官が御出席して御挨拶を申し上げるという予定にしていたわけでございますけれども、急な会議が入りまして、かわって私から御挨拶申し上げます。

第11回太平洋広域漁業調整委員会が開催されるに当たりまして一言御挨拶申し上げます。

委員の皆様方におかれましては、大変お忙しい中、部会に引き続きましてまたお集まりいただきましてまことにありがとうございます。

先ほど会長からもお話がありましたように、広域漁業調整委員会の役割でございますけれども、都道府県の区域を越えて分布・回遊する資源の適切な管理を目的といたしまして、平成13年に設置され、国が作成する広域の資源回復計画について御審議をいただいているところでございます。

資源回復計画は現在までに全国で18の広域計画、46の地先計画が作成されておまして、資源回復のための取組が展開されているところでございます。太平洋側を管轄する本委員会におきましては、平成14年に作成されました伊勢湾・三河湾小型機船底びき網漁業対象種資源回復計画を皮切りに、現在までに7つの計画が作成され、これらの計画に基づき、資源回復が図られてきているところでございます。

改めて申し上げるまでもなく、昨年3月に新たな水産基本計画が作成されたわけでござ

いますけれども、この中に水産資源の回復・管理の推進ということが重要な政策課題の1つとして位置づけられているわけでございます。

このようなことから、水産庁といたしましては、水産資源の適切な管理施策の推進につきまして鋭意取り組んでいるところでございますけれども、皆様に御審議いただきまして資源回復計画もその主要な施策の1つであるわけでございます。

また、部会でもいろいろとお話が出ましたが、水産業にとって未曾有の課題となっております燃油高騰問題でございますけれども、部会でもお話しいたしましたように、緊急対策を鋭意実施中であるわけでございますが、こういう対策に加えまして、水産資源の適切な管理、これに積極的に取り組んでいくということが今後の活力ある漁業構造の確立につながるものと考えております。

このような意味で、広域的な資源管理を話し合う本委員会、この役割は一層期待されるものと考えております。

本日は、皆様方の有意義な御審議が行われて、資源管理の一層の推進が図られることを祈念いたしまして私の挨拶といたします。

よろしく願いいたします。

○澁川会長 本村部長さん、ありがとうございました。

資料の確認

○澁川会長 それでは、本日お配りしてございます資料の確認から入りたいと思います。

事務局、お願いします。

○小林課長補佐 それでは、お手元にお配りしております資料の確認をさせていただきます。

申しおくれましたが、私、水産庁管理課の小林と申します。よろしく願いいたします。

それでは、お配りしている資料でございますが、まず議事次第。次に、委員名簿。委員名簿につきましては訂正がございます。上から7番目の千葉海区の小滝委員の役職のところで、「房総ちくら漁業協同組合」と書いてありますが、ここは「房州ちくら漁業協同組合」ということで訂正をお願いいたします。おわび申し上げます。それから、次に配席図。それから、出席者名簿。

それから、本日の委員会で御説明させていただきます資料といたしまして、資料1とい

たしまして、「2008年資源評価対象種（太平洋漁業資源）の資源状況」というものが書いてある2枚紙の資料。

それから、資料2-1と右肩に書いてあります「マサバ太平洋系群資源回復計画の概要及び取組状況について」ということで、4枚つづりの資料でございます。

配布しております資料につきましては以上となっておりますが、不足等ございましたら事務局のほうまでお申しつけ願います。

よろしゅうございますでしょうか。

説明の途中でも資料等に落丁がございましたら、その都度お手数ではございますが、事務局のほうにお申しつけいただければ幸いです。よろしく願いいたします。

○澁川会長 お手元に資料が届いているようでございますので、進めさせていただきます。

議事録署名人の選任

○澁川会長 それでは、議事に入らせていただきますが、最初に、後日まとめられます本日の委員会の議事録署名人を選んでおく必要がございます。これにつきましては、本委員会の事務規程第12条により、会長の私から御指名させていただくことになっております。僭越ではありますが、指名させていただきます。

都道県海区互選委員からは愛知県の吉戸一紀委員さん、農林水産大臣選任委員からは金井関一委員のお二方に本日の委員会に係る議事録署名人をお願いいたします。

お2人の委員の方、よろしくお願い申し上げます。

議 題

(1) 水産資源の状況について

○澁川会長 それでは、議題1番の「水産資源の状況について」に入りたいと思います。

本委員会に設置されました部会の区域をまたがる資源でございますマサバ太平洋系群について、中央水産研究所資源評価部の渡邊主任研究員から説明をいただきたいと思います。

渡邊さん、どうぞお願いします。

○渡邊主任研究員 中央水産研究所の渡邊と申します。マサバ太平洋系群の資源状況について御報告させていただきます。

お手元にごございます資料1をご覧ください。こちらに2008年資源評価対象種の資源状況の一覧表がございまして、マサバ太平洋系群は左側の上から3番目にごございます。2008年の資源評価の結果ではマサバ太平洋系群の資源水準は低位、動向は横ばいという厳しい見方がここにあらわれておりますが、その中身につきましてグラフ等を使いまして、少し詳しく説明させていただきたいと思っております。

めくっていただきまして、その裏のページ、4つの絵がありまして、上の左から右、下の左から右という順番に見ていただきたいと思っております。

まず上の2つの図のうち、右側のほうにマサバ太平洋系群を対象とした漁獲量の推移を1960年から2007年まで示してございます。1970年代後半、75年から79年にピークのありましたマサバ太平洋系群の漁獲量は、御承知のとおり、80年代に大きく減少して、1990年には最低水準に落ち込みました。90年以降、卓越年級群が出現するたびに漁獲量は一時的に回復してきたのですが、2000年代の初めころにはまた低迷いたしました。2004年、ここでまた大きな加入がありまして、漁獲量は回復し、横ばいの状況にあります。2003年から2007年までの漁獲量の数字を示してございまして、2007年は18万トンの漁獲がございました。

その下、左側のグラフですが、これは1970年からの漁獲物の尾数を年齢別に積み上げたものです。1970年からお示ししてございまして、漁獲量の多かった時代には2歳、3歳、4歳というものもたくさん見られたのですが、資源が低迷した90年以降は、ほぼ0歳、1歳といったところが漁獲物の主体になっていることがわかります。

この92年からの最近年の状況をその右側に拡大して載せてございます。1992年以降ですと、1992年、それから1996年に卓越年級群が発生しまして、これに支えられて、1993年、1996年、97年と大きな漁獲がございました。しかし、この年級群が消滅しますと、漁獲量はまた下がるということで、卓越年級に依存した漁獲が続いておりました。

2004年に発生しました2004年級群は、これらに比べますと、良好な生き残りを示してございまして、2006年では2歳として、2007年では3歳としてまとまった漁獲が見られまして、このようなことは1970年代、80年代にしか見られなかった状況で、最近年ではなかったことで、2004年級群につきましては生き残りの状況がよくなっているということが漁獲物の年齢組成を見てもわかります。

では、次、めくっていただきまして2ページ目です。

2ページ目、上の段、左の図は北部まき網の漁獲データから見た資源量の指標値の推移を示してございます。これを見ますと、白丸が資源量指数といいまして、漁獲データから得

た資源量の水準を示す数字なのですが、これを見ましても2005年、6年、7年と高い数字が出ておりました、漁獲データから見ても資源量の高い数字というのがはっきりあらわれているということがわかります。

上の段の右のグラフは、漁業とは独立して調査で行っておりますサバ類を対象とした卵の量を調べたグラフです。卵の量は産卵量という用語を使って示しておりますが、これによりますと、産卵量が低迷して以降、ずっと1980年代、90年代と産卵量がずっと少ないまま推移していたのですが、2006年、2007年に大きく増加しております。これはサバ類の卵を生む親の量が増加したということを示すことができるというふうに考えております。残念ながら2008年につきましては卵の量が下がっておりまして、これはあらかじめ資源評価のほうから予測されておりました親魚量の減少を示していると考えております。

下の段にいきまして、今度は親の量ではなくて、子供の量がどう推移してきたか、あるいは今後どう推移するかということを示したグラフが下の段の左側です。これも各種の調査船調査、あるいは漁業情報から得た新規加入魚、ある年に生まれた子供の量の多さを示す折れ線グラフです。グラフが高いところであれば、その年に生まれた子供の量が多いと見てください。

たくさん調査があるのですけれども、これを見ますと、卓越年級群でしたら2004年などはどの調査の数字も一致して高い傾向を示しております、2004年級群がたくさん生まれてたくさん加入した年だったということがわかります。2005年については調査によって値がばらついたのですが、2006年につきましてはどの調査も一致して低い値を示しております、2006年生まれの子供は少なかったということがわかります。この2005年と2006年に生まれた子供が少なかったことが、先ほどお話ししました2008年の産卵量の減少につながっていると考えております。その次の2007年につきましては、これは一転して各調査による指標は一致して高い値を示しております、2007年生まれの子供というのは多いだろうと考えております。2008年生まれにつきましては、完全に終了した調査がまだ2つだけなので、はっきりしたことはこの段階では申すことができないのですけれども、終わっている調査を見る限りは数字が低いということで、2008年は2007年に比べると高くない、多くないだろうと考えております。

下の段の右には資源量の評価の結果を示しております。2つグラフがありますが、左側のグラフ、黒い丸が1970年からの資源量の推移を折れ線で示したものです。漁獲量の動向とほぼ一致しまして、70年代には高く、80年代に減少し、90年以降卓越年級群が出たとき

に一時的に増加しましたがけれども、2000年代初めまで一時ひどく低迷した時期がございました。2004年に2004年級群が加入して以降はここよりは一段高いところになって、資源量は横ばいで推移しております。ですから、70年の高水準期を含めて考えますと、現在の水準は低水準と言わざるを得ないのですけれども、2000年以降の極めて低い水準は現在脱して横ばい状況ということで、2000年初めのころに比べれば資源は良くなっていると考えております。

最後のページを見ていただきたいと思います。

最後のページ、左側には幾つか指標があるのですけれども、青い棒グラフをご覧ください。これが産卵量に対応した卵を産む親の数、親魚量を示した棒グラフです。親の量は1990年代以降ずっと低い水準でおりまして、卓越年級群が入っても親になるまで十分生き残ることができずに資源がなくなっていったということがわかります。ですが、2004年級群につきましては、2005年、6年、7年と親魚量が増加しておりまして、2004年級群は親になるまで残って産卵に貢献できたということがわかります。親魚量の面から見ても、一時期の低い水準は現在2004年級群に支えられて、低い水準を脱して、やや回復しているという状況にあります。

その隣、右側のグラフですが、では、今期どのような年齢構成で資源が構成されるかということをお示したグラフです。

2008年のところを見ていただきますと、濃い青が2008年級群、0歳魚ですね。これは余り多くないと考えております。水色が2007年級群で、こちらが主体となって、今の資源を支えていると考えています。親魚量となる2歳、3歳、4歳というところは全体の比率ではそう多くありませんが、緑色の4歳魚というのが資源を構成しているということは近年ではないことですので、年齢構成の面からも高齢の魚の生き残りがまだいい状態で資源が構成されているということが言えます。今後については、この2007年級群が2004年級群と同様に親になるまで生き残って産卵に入ってくるということを期待したいと考えております。

マサバの資源状況については以上です。

○澁川会長 渡邊さん、ありがとうございました。

ただいま渡邊主任研究員のほうから御説明をちょうだいしたわけでございます。ここで御質問をお受けしたいと思いますが、いかがでございますでしょうか。

竹内委員、どうぞ。

○竹内委員 いろいろデータを見せていただきましてありがとうございました。

わからないことがありますので、2、3質問させてください。

最後から2番目の青い棒グラフで見なさいという話で、親魚量が多いというので期待しているのですが、この親魚量というのはどうやってはかるんですか。

○渡邊主任研究員 まず全体の年齢別の資源尾数というのを漁獲尾数を積み上げて計算するコホート解析という手法で全体の年齢別の資源尾数を推定した後に、それから漁獲物の調査をして、各年齢どれくらいの割合で成熟しているか、親であるかということ进行调查で計算しまして、その掛け算で親魚量を計算しております。

○竹内委員 わかりました、というか、それだけで、あ、そうかと思うだけで、わからないんですけど、それで最初のサバの絵を入れますと4枚目、漁獲物の年齢組成というのがございますね、年ごとに。2枚続いていますね。漁獲物の年齢組成が1年間分だけ出ているのですが、これをシーズンと漁場に分けてブレイクダウンできませんか。

○渡邊主任研究員 できます。もともと漁場別、シーズン別に分けたものを積み上げてお示ししていますので、すぐできます。

○竹内委員 それがあると、親魚をどれだけ残すかという話が見えてくると思うんですね。小さいものがある場所では操業しない。極端に言えばね。そういうことまでやらないと、資源は残らないと思うんですね。どうでしょうか。

○渡邊主任研究員 おっしゃるとおりだと思います。

○竹内委員 どうもありがとうございました。

○澁川会長 ほかにございませんでしょうか。

このマサバの資源回復計画は、先ほど来グラフでご覧いただいておりますように、2004年に卓越年級群が発生したものをいかに取り控えて、親にして、産卵させようかという作戦だったわけです。まき網業界の方々の大変な御努力で、少なくとも2007年には、例えば20年近く途絶えておりましたたもすくい網が復活するなど、さまざまな現象が出てきて、2004年級群が親になって産卵したであろうということで2007年級群が高い水準になっている。こういうことでもあります。そういうことで、現在2サイクル目がどうなるかという話になっているというふうに見ていただければよろしいかと思うんですが、新しい委員さんもおいでになりますので、わかりにくい点もございますでしょうか。もし何か御質問ございましたらお受けしたいと思います。

宮川委員さん。

○宮川委員 2007年の伊豆諸島に関してのマサバは結構な水揚げがあったのですが、2008年に入ってから本来1月の半ばごろから漁があるのが、2月の下旬から始まって、終わるのもすごい早かった。ゴマサバに関してはほどほどですが、マサバは今年ものすごく少なかったのですけれども、どういうあれで伊豆諸島のマサバが少なくなっているのか。

○渡邊主任研究員 まず先ほどまでお話が出ております2004年級群が3歳になってやってきた2007年の漁期にはたもすくい漁が3000トンぐらいの十分な漁獲をすることができた。2008年についてはこれが1000トンいかない漁であったということについてですが、ただ1つの年級だけでたもすくい漁を十分支えるにはやはりそれなりの資源量がなくてはならず、2007年までは辛うじて資源量を支えることができたのだけれども、2008年については2004年級群も減少してきている。そして、それに続いてくる2005年、206年級群というのは、もともとが少なかったということで、たもすくいを支える量が自然に減ってしまったということもあって減少してしてしまったというふうに考えています。

○宮川委員 サバの質も結局2007年にとれたサバは昔の、それこそ27年前のサバと同じに脂が乗っていて、うちのほうで寒サバというんだけれども、すごいサバだったのですけれども、今年獲れたサバには脂がすごい少なかったということは北目から下ってきたサバじゃないんじゃないのというような、我々漁業者の中ではサバの味が違うねということですね。このサバは来ているところが少し違うのかな、というようなことを考えています。

○渡邊主任研究員 質が違うという話は私も聞いていまして、確かに2007年にやってきたものは昔と同じように大きく回遊して産卵場に大挙してやってきた、十分に回遊できてきた魚だと思うのですが、今のマサバ太平洋の地先の資源というのも、完全に別個に独立して地先にくっついていてではなくて、沖合を回遊するものとながって存在するものだと思うので、全く別個な資源だとは考えていないのですけれども、ただ2008年を構成したものは沖合を十分に回遊して、南下してやってきたものが主体であったというよりは、沿岸に残っていたサバが中心になって獲られたのではないかというふうに私も考えております。

○宮川委員 定置に入るマサバに関しては、今年も良い水揚げはあったのですが、沖合のたもすくいについては期間が短か過ぎて、たもすくい専門でやっている仲間はマサバがだめだから、ゴマサバだけれども、ゴマサバは20円、30円安くなってしまって、油の高騰でそれをやっても赤字だからということで、サバはやめてしまったんです。

○澁川会長 どうぞ、小滝委員さん。

○小滝委員 千倉の定置ですが、去年も今年もマサバの水揚げは変わりません。それから、昔に比べて、前は6月頃獲れなくなったのですが、それが延びてきています。それから、網に入ってくるのは、島のサバが終わる時分からです。ですから、たもすくいの方と定置に入るのはちょっと違うので、北の方から産卵のために南下するのが沖の方へ行って、上る時には沿岸にくる。そんなふうを考えているのですけれども、先程、今年の島回りのたもすくいは早くマサバは終わったと言いますけれども、定置の方はそういうことはありません。

それから、去年、2007年ですけれども、島のたもすくいのサバの対象魚はほとんどゴマだったのですけれども、定置の方では全部マサバです。そういうこともありました。ですから、回遊と申しますか、それが少し昔と変わったのかなとも思っていますが、定置に関してはここ2、3年は水揚げは変わっておりません。

○澁川会長 どうぞ、鈴木委員さん。

○鈴木委員 今のに関連しまして、私らのところでも話題になっているのでちょっとお聞きしたいと思うんですけれど、私らの若いころというか、小さいときは、北部でまき網をやっているのですけれど、ゴマサバというのは、北限が銚子沖で少し見えるか見えないかぐらいで、私が若いときはゴマサバというのはそれより北でというか、見えなかったんです。今は八戸沖でもゴマサバが獲れるんですよね。どうしてこんなふうになってしまったのかなということで、はやりの温暖化のせいかなというようなことで話題になっているんですけれど、今のお二方の質問とも同じような質問だと思うんです。

ですから、我々のほうでここ4～5年になるか、ゴマサバが獲れているので、やっとゴマサバに少しなれたという程度で、買い人のほうもゴマサバなんか扱ったことがないなんて北部では昔は言っていたものなんです。そういう状況なので、わかりましたらお願いいたします。

○澁川会長 どうぞ。

○福島委員 同じく北部まき網の立場でお伺いしたいと思うんですが、今の意見にやや補足的なことになるのですが、申し上げているようにゴマサバというのは北のほうではかつては獲れなかったんですね。私らが聞いてきた範囲では、南のほうで獲れるために、脂の乗り方もないんだというふうに聞いてきたのですが、昨今のゴマサバは非常に脂が乗っておいしいんですね。どういうふうにしてその組成というか、変わってきたのか、冷たい、ある

程度の水温で生息するために脂が乗ったのかどうか知りませんが、八戸あたりの加工屋さんに言わせると、ノルウェーあたりからのサバの入手が困難になったというふうなこともありまして、全部ではないようですが、シメサバをつくるのには、はっきりとマサバとゴマサバは分けているようですが、ゴマサバだということでシメサバの生産を始めた人たちも中にはいらっしやる。前は、さっきも言いましたように、肉質がぼそぼそしていてどうも締まりが悪くて、仕上がりがよくなかったというのが、最近はそういうふうな状態で、どうしてマサバと同じように、結構なことなのですが、肉質に脂が乗るようになったのか、その辺をちょっとお伺いしてみたいと思います。

○渡邊主任研究員 まずゴマサバが北で分布するようになったことにつきましては、私も入省したのが1992年で、そのころは確かに北のほうでゴマサバが獲れるなどという話は全く聞かないでいました。私どもの研究室におります川端がゴマサバを追いかけているものなのですが、川端の調査からの考えですと、2002年か2003年ごろに北上暖水が非常に強く北へ張り出したときに、ゴマサバが一気に北に分布を広げて沿岸定置やまき網などで獲れるようになった。その後、北上暖水が波及しなくなった年でもゴマサバが北に回遊するということが続くようになったということで、そのころの北上暖水をきっかけにしてゴマサバが北の分布を獲得したのではないかというようなことを考えているようです。そこに温暖化の影響があるのか、ないのかということにはちょっと私にはわからないのですけれども、大きな変化が2000年代に入ってあった。ゴマサバは今変化しつつあるときなのだろうと考えています。

脂の乗りににつきましては、私は栄養の専門ではないので、よくはわかりませんが、昔、ゴマサバが分布していたあたりというのは、せいぜい千葉県ぐらいまでで、黒潮域です。黒潮域と親潮域では当然えさの量も質も全然違いますので、南に分布していたゴマサバはやはりえさの質から脂が少なく、北の豊富なえさを利用できたマサバには脂の乗りがよかった。それがゴマサバの分布がマサバとほぼ変わらなくなって、同じえさを利用するようになって、ゴマサバの脂も乗るようになったのではないかというふうに、私の意見ですが、想像しております。

○澁川会長 ものすごく興味ある話が飛び交っておりますけれども、司会のほうでは制御できない雰囲気がございますが、済みません。やっぱり局地での現象を重さね合わせていて一定の姿が見えてくるという、それも1年やそこらでは恐らくなかなかとらえがたい話だろうということだと思っております。渡邊さんの話もなかなか興味ある話ですが、断定

するという話はとてもできる話ではありませんので、そういうことですね。

ほかにございませんですか。

どうぞ、海野さん。

○海野委員 サバの稚魚の生態というものは、日本近海で生まれるものですか。外地から回遊してくるものですか。少しお聞きしたいんですけど。

○渡邊主任研究員 日本でとれているマサバもゴマサバも日本近海で卵が生まれ、生育しているものと考えています。

○海野委員 私もカツオさお釣り、一本釣りを40年もやってまいりましたけれど、50年代は黒潮の流れの大きい、80マイル、100マイルで大きな大群が真っ赤にサバの稚魚を餌床にして、そういう状態が今までよく見たんですけど、平成10年ころからはそういう何百マイル沖で小サバが全然見えんようになりました。これもやはり温暖化のせいですか。それでも資源減少のせいですか。

○渡邊主任研究員 何十マイルか、距離はわかりませんが、私どもの研究室の調査でずっと沖合に出て幼稚魚調査を行っていきまして、数は少ないのですが、やはり黒潮の沖にサバの稚魚が今でも分布することは認めています。ただ、その量が減ってしまったのはやはり資源が減少したためだと考えています。

○海野委員 サバの稚魚の資源も少なくなった。カツオの資源も少なくなった。両面で餌床にするものが少なくなったのかなと思っておりますけれどね。

今はまき網船団も非常に航海計器が発達して、見えなくても、ソナーというもので、見えなくても全部一網打尽でとってしまうから、確かに私は乱獲だなと常々思っております。

○澁川会長 海野委員さん、どうもありがとうございました。

ほかにございませんですか。

減少した資源を回復させようという舞台がこの委員会でありまして、マサバは太平洋北と南、両方にまたがる海域でこれを回復させようという壮大な挑戦を今やっている最中でございます。2004年から実質スタートしたというふうにとらえていただいてよろしいのですが、そういうことで、現象面も少しずつ違った話が出てまいっているようですけれども、いずれにしても、2004年にたくさん子供が生まれた。これを何とか残す。そして、その年に生まれたのが親魚になって、確かな卵を産んでくれた。子供が残った。それをこの後さらに残して、もう一遍子供を産ませようじゃないかという話がこの大作戦です。

ほかに御意見いかがですか。

意見があるかもしれませんが、次の議題に入って、現在の資源回復計画がどんなふうになっているかという話を勉強していただきまして、さらにまた御意見がございましたら、そこで意見交換させていただこうというふうに思います。

(2) マサバ太平洋系群資源回復計画の取組状況について

○澁川会長 それでは、議題2のマサバ太平洋系群資源回復計画に係る議題に入ります。

本計画は平成15年10月に公表されまして、今年の3月に開催された本委員会におきまして計画期間を平成23年度まで延長するということが了承されたものでございます。

それでは、取組の状況につきまして事務局より説明をお願いします。

○小林課長補佐 それでは、マサバ太平洋系群の資源回復計画の概要と取組状況につきまして御報告をさせていただきます。

資料につきましては、右肩に資料2-1と打ってある資料でございます。

まず、計画の概要でございますけれども、マサバ太平洋系群の漁獲量につきましては、1978年の147万トンピークに1990年には2万トン程度にまで減少したということでございます。その後、1992年と96年に卓越年級群というものが発生したわけなんですけれども、当時の未成魚の多獲によって資源回復が図られなかったという状況がありまして、こうした状況を踏まえまして、卓越年級群の発生時にはこのタイミングを逸することなく、未成魚を取り残して、産卵親魚を確保していこうということがこの回復計画の目的でございます。

先ほど会長からもありましたが、これは平成15年から5年計画でやってきたのですけれども、後ほど資源状況でも話しますが、07年の年級群というのが比較的良好ということで、それを保護するためにはやはりもう少し延長して頑張っていかなければいけないだろうということで、2011年、平成23年まで取組を延長したということでございます。産卵親魚量を18万トン水準以上にしようというところを目標といたしまして、対象漁業であります太平洋北部水域の大中型まき網漁業を中心といたしまして、休漁等の努力量削減に取り組んでいるところでございます。

2番目に、太平洋北部大中小型まき網漁業の取組状況ということで書いてございますが、まず休漁でございます。

休漁につきましては、操業続日数の削減率を年によって10から30%に設定いたしまして、

マサバの漁獲量が一定量を超えた場合に、例えば2000トン、3000トンとれたら休むというようなことで、機動的に休漁をしていくということを主体に行っております。以前は定時休漁もやっていたのですが、マサバがいない時期に休漁しても余り効果がないのではないかとということで、とれたときに休漁するという形を現在はとっているところでございます。

休漁の実績でございますが、計画が始まったところからの状況でございますが、2003年漁期、この計画が2003年、平成15年10月にできているものですから、その年は11月からという形になります。これは7から6月までの漁期年ということで一応整理させていただいているのですが、2003年につきましては休漁日数が7日、2004年につきましては22日、2005年は30日、2006年は24日、2007年は31日、2008年は21日ということで、2004年に卓越年級群が発生しました関係上、削減率を2004年から高めまして、それで休漁をしているということでございます。

今申し上げましたところをもう少し具体的に月別の休漁だとかそういうものにつきましては資料2-3のほうにつけてございます。これについては御参照いただくということで、説明は省略させていただきます。

それから、2番目で、減船でございます。減船につきましては、2003年に1カ統、附属船1隻、2004年度には4カ統、附属船8隻、これを減船しております。

それから、2006年の7月以降、漁獲状況に応じて自主的に操業時間の短縮、あるいは投網回数の制限、そういった取組も自主的に行われているという状況でございます。

また、その他の取組といたしまして、これは2005年度からですが、ミニ船団方式の試験操業ということで現在3カ統実施されております。これにつきましては後ろに資料2-4で資料をつけておりますので、後ほど担当のほうから簡単に御紹介させていただきます。

もう1ページめくっていただきたいのですけれども、資料2-2でございます。これは昨年からずっとこういう形で御紹介させていただいているのですけれども、資源回復計画の取組の評価ということでこういうものをつけさせていただいたのですけれども、これについて簡単に説明させていただきます。

左側の0歳魚の資源尾数の推移というところで、これからの説明は先ほどの資源状況の説明とかなり重複する部分がありますけれども、92年と96年に卓越年級群が発生したわけですが、当時は先ほども申し上げましたけれども、未成魚の多獲というものもあり、資源回復が図られなかったということでございます。その反省を受けて資源回復計画を2003年につくって、次の卓越年級群が出たときにこれを保護していこうということにしたわけで

ございます。一番右に棒がありますが、07年にも比較的良好な加入が見られておりまして、先ほど申し上げましたが、5年間で計画が終わるところでしたが、07年に出てきたということで、これをやはり保護していかなければいけないだろうということで、計画の延長をしているというわけでございます。92年、96年と04年に卓越年級群が発生していますので、そのとり方だとか、資源の状況がどうなったのか、どういうふうに変わっているのかということと比較したのが右隣の図でございます。

92年級群につきましては、赤色の漁獲尾数というところを見ていただくと、これが漁獲した尾数なのですけれども、92年級群は1歳魚を多獲していた。96年級群につきましては0歳と1歳魚を多獲していた。04年級群につきましては、96年、92年に比べまして、総じて0、1歳の漁獲が少ないということがここで見受けられるわけでございます。

また、資源尾数の青い棒グラフを見ますと、04年級群につきましては、棒グラフの右から1つ目と2つ目の部分が2歳、3歳になっているのですけれども、その資源尾数というのは92年、96年と比較すれば倍以上の資源の大きさになっているということがわかるわけでございます。

続きまして、もう1枚めくっていただきますと、年齢別漁獲尾数の推移。先ほど水研センターからもありましたが、90年当初、最近の年齢別の漁獲尾数の推移を見ますと、3歳魚の漁獲尾数を緑色で示しておりますけれども、90年から緑色の部分というのが非常に少なかった。ところが、07年になって、ようやくまとまった3歳魚の漁獲が見られたということで、こういう資源の構造についても徐々にではありますけれども、改善が図られつつあるという状況になっているということがうかがえると思います。

それから、隣の資源量と産卵親魚量の推移でございます。資源量につきましては、92年、93年、96年、97年には2つの高い棒が立ったわけです。50万トン以上の資源量が2年続いたわけですが、04年以降につきましては、50万トン以上の棒が4本立ったということでございます。そういうことで、これからも資源状況というのは昔に比べては改善されてきたのではないかと見受けられるわけでありまして。

また、産卵親魚量でございますけれども、これは折れ線グラフのほうでございますが、06年に大幅に増加しまして、近年で最も大きな規模になっているということでございます。ただ、05年、06年の加入が非常に低位であったということから、今後産卵親魚量が一時的に減少していくという状況にあるわけでありまして。そういうことで、先ほども渡邊さんからもそういう説明があったように、ちょっと予断はできないような状況にはあるという

こととございます。

ただ、04年に卓越年級群が出て、それを一生懸命保護してきたわけですが、このように05、06については人為的な努力ではどうしようもない自然界の加入の失敗によってこうなってしまったということで、その部分はどうか御理解をいただきたいということとございます。

次のページに移りますが、0歳魚の資源尾数の推移と08年予測というのがありますが、04に卓越が発生したのですけれども、05、06については残念ながら加入に失敗したということとございます。しかし、07年級群については何とか生き残ったわけでございまして、今、海に泳いでいるわけでありまして。そのかわり、先ほどの報告にもありましたけれど、08年の加入については今のところ低位であるということとございます。

こういう今の資源状況の中で、今、海にいる魚については07年級群が今後主体になっていくということとございますので、この07年級群だけの資源になるものですから、この資源というのをどうしてもしっかり保護していかなければならないということが課題になっているわけでございまして、計画の取組というのを着実に実施していく必要があるというふうにご考えているところでございます。

以上でございますが、資料2-4のミニ船団化のほうの取組につきまして、簡単ではありますが、御参考までに御紹介させていただきます。

○加藤課長補佐 では、本日お配りしております資料2-4をごらんください。

水産庁沿岸沖合課の加藤です。よろしくお願いいたします。

大中型まき網漁業におけるミニ船団化の取組でございます。この目的につきましては、このページの上に黄色で囲ってあるところを書いてございます。従来、大中型まき網漁業は4から6隻で操業しておりますが、経費削減を目的にその隻数構成を見直し、網船に若干の魚を積む機能を持った改革型の漁船を導入しまして、それに通常の運搬船を1隻加えた体制での操業に取り組んでいるところでございます。この最大の目的は、操業コストを下げることにより、これまでよりも漁獲努力量を削減した上でも経営が成り立つことを実証することとございますし、また、船の一定の大型化によりまして居住環境等を改善して就労環境を良好にするということも目的に行っております。

現在3カ統でやっております。この6ページの左側にあります80トン型の1カ統は4隻体制であったものを、今申し上げます2隻体制で操業しております。その下に漁獲実績が各年度ごとに記載してございますが、直近では、今年度の半年で見ましても、従来型

の船団よりも実際の漁獲量は減っているという状況でございます。それでも経営が成り立つような形でやっているということでございます。

次に、②としまして、これは135トン型で、サバだけではなくて、夏場の時期にはカツオ・マグロ類を漁獲している船団でございます。この従来型船団につきましては、5ないし6隻でこれまで操業していた船団をミニ船団化したということございまして、その実績につきましては、下に書いてあるとおりでございます。直近で見ますと、トータルとしては漁獲量は75%になっているということでございます。

それから、次のページでございます。これが本年度から実施しているものでございまして、これも同様に135トン型でございます。これにつきましては、まだ半年の実績ということでございますけれども、漁獲実績については下に書いてあるとおりでございます。

簡単ですが、以上です。

○澁川会長 以上で説明が終わりました。内容につきましては御質問ございますれば……。

金丸委員さん、どうぞ。

○金丸委員 例の4年から5年の卓越年級群の話がありましたね。あれで見ると例えば00から01というところは山がきていないのですけれども、これは4ページの上の表ですね。こういうのは何か気象条件がその当時非常に稚魚やら卵稚仔に影響があつて、こういうふうな山が見えなかったのか、何かありますか。ほかは全部4年ないし5年で山がずっと出てきていますね。00か01か、何かそこら辺にもう少し山があつてもいいような感じがするんですよ。どうですか。

○澁川会長 92、96ときて、その次ですよ。その次が、本来なら00に立ち上がるんですか。と見るべきなんでしょうね。いかがですか。

○渡邊主任研究員 実は2000年と2002年に生まれた魚たちというのも、親の量にしてみると、比較的よく残ったというか、たくさん入ってきた年だったので、山はないのですけれども、親が少なかった割にはよかったということで、数年置きにいい年がきているということはこの時期にもあつたんですね。ただ、親の量が非常に少なかったということがあつて、余り高い加入にならなかったというふうに考えています。逆に96年や2004年というのは、親の量がそれほどなかったにもかかわらず、非常にいい生き残りがあつたということで、むしろ私は96や2004年に何か——その「何か」というがまだ研究中ではあるのですけれども、非常にいいことがあつて加入があつた。だから、この山がなかった時代に悪いことが続いたというものではなく、逆ではなかいと考えております。

○金丸委員 現実には、普通だったら4年、5年の確率で起こるのであれば、何か悪いことがあったのではないかと思うんだけど、特にそれは気象条件等ではないということなんですね。

はい、わかりました。

○澁川会長 山下委員、どうぞ。

○山下委員 資料2-2の今の右のほうの図なんですけれども、92、96、04年級群のとうところですよ。

1つまず細かい話を伺いたいのですが、この漁獲尾数と資源尾数、これはどちらも年の初めてでとっているのか、それとも漁獲尾数は年の終わりでとっているのか。つまり、この青い棒の内数として赤い棒グラフがあるのか、次の年に持ち越すのかということをもまず伺いたいです。

○渡邊主任研究員 まず資源尾数のほうは年の初めです。この棒グラフの中からこの赤い棒グラフの分をとったということで、漁獲尾数は1年を通じてです。

○山下委員 そうすると、例えば04年のところを見ると、大体最初の資源尾数が38億尾ぐらいなんです、目分量ですけども。それから、その年にとった漁獲尾数が8億尾ぐらいなんです。そうすると、38引く8になるわけですね。そうしたら30ですよ。しかし、翌年に持ち越したのが20なので、30から20に減ったということなのですが、これが自然減なのですか。これは漁獲以外の減少分ですよ。これはどうしようもないのでしょうか。せっかくとってないのに、何かもったいない感じがしますが。

○渡邊主任研究員 もったいないですけど、自然減でどうしようもない部分です。

○山下委員 大体こんなものだと。

○渡邊主任研究員 はい。

○山下委員 わかりました。

○澁川会長 ほかにございませんか。

(3) そ の 他

○澁川会長 それでは、予定の時間をちょっとオーバーしておりますので、運ばせてもらいます。

議題の3はその他でございますが、委員の皆様方から何かございますでしょうか。

ございませんか。

事務局から何かありますか。

○小林課長補佐 それでは、本委員会に置かれました各部会の状況につきまして、本委員会のほうに報告するということになっておりますので、簡単に御報告させていただきます。

本日11時から開催されました第15回太平洋北部会におきましては、現在実施中の太平洋北部沖合性カレイ類資源回復計画とマダラの資源回復計画の取組状況の報告がなされておりました、その対象資源の報告もなされております。

また、本日午後13時30分から第16回太平洋南部会におきまして、現在実施中の伊勢湾・三河湾小型機船底びき網漁業対象種の資源回復計画、それからイカナゴの資源回復計画、ヤリイカ太平洋系群（南部）資源回復計画、太平洋南部キンメダイ資源回復計画の取組状況と対象資源に係る状況についての御報告がなされております。

以上、簡単でございますが、各部会の状況につきまして御説明をさせていただきました。

以上です。

○澁川会長 資料がなくて、各部会でそれぞれもう既に内容を把握されたと思いますが、部会の話は今の説明でおしまいということでございます。あしからず。

それでは、事務局から次の委員会の開催予定についてお願い申し上げます。

○小林課長補佐 次回の委員会の開催予定でございますが、昨年と同様に来年3月ごろに次の委員会を開催したいと考えております。日時、場所等につきましては、各部会との関連もございまして、会長及び委員の皆様のお都合もお聞きしながら、追って御連絡をさせていただきたいと思っておりますので、よろしくお願いたします。

○澁川会長 次回は例年どおり来年の3月ごろということでございます。年度末でございますけれども、よろしくお願申し上げます。

閉 会

○澁川会長 それでは、本日の委員会はこれにて閉会とさせていただきます。

委員各位御臨席の皆様には議事進行に御協力を賜りましてありがとうございます。

なお、議事録署名人に指名させていただきました愛知県の吉戸委員さん、それから金井委員さんにはどうぞよろしくお願申し上げます。後日、議事録が送られるようでございます。

これもちまして、第11回太平洋広域漁業調整委員会を閉会させていただきます。
ありがとうございました。